

郷土博物館だより [つはく]

津博

TSUJIAKU

2018. 5 No.96



津山郷土博物館
Tsuyama City Museum

(表紙写真 津山城の夜桜)

トピックス

第 114 回文化財めぐり
にぎわい交流館での複製品展示
耐震改修工事の状況

資料紹介

河井達海の油彩画

東 万里子

研究ノート

ある書簡から見た鞍懸寅二郎と井汲唯一の交流
小島 徹

お知らせ

事務局員異動
新刊のご案内
平成 30 年度行事予定



第114回 文化財めぐり

3月10日（土）第114回文化財めぐりを行いました。今回は近長から杉宮周辺を散策しました。近長は江戸時代この辺りに飛地を持っていた土浦藩の代官所があった場所で、また周辺には多くの石造物などがあります。春うらの暖かい日、これらの旧跡を楽しく巡ることができました。



博物館キャラクター「パレオ」

見ていただけ
ましたか？

にぎわい交流館にて資料の複製を展示

「JR津山駅にぎわい創出プロジェクト」の一環で、2月15日（木）～4月15日（日）の期間、津山駅前のにぎわい交流館2階にて、当館所蔵の「江戸一目図屏風」と「拾万石御加増後初御入国御供立之図」の複製品を展示いたしました。



耐震改修工事の状況

1月に耐震改修工事実施設計のための調査を行いました。展示室などの壁や柱の内装をはがし、梁や壁の状況、また内部の鉄筋の配置や状況を確認しています。

資料紹介 **河井達海**（一九〇五〜一九九六）の油彩画

東 万里子

河井達海は、明治三十八年（一九〇五）津山市で生まれました。昭和四年（一九二九）に第十回帝展に初入選を果たしたあと、第六回文展特選など数々の賞を受賞します。昭和二十四年には、大阪学芸大学（現…大阪教育大学）教授となり、多くの人たちの指導にあたり、昭和五十二年には勲二等瑞宝章を叙勲しました。

贈いただいた作品やスケッチのモチーフは、人物や花、景色、動物など多岐にわたり、好奇心旺盛であったことがわかります。昭和三十二年に開いた個展の際に恩師にあたる斎藤与里から送られた推薦文には、「河井君の芸術慾は現状に満足する事が出来ず常に飛躍に飛躍を続けて来た。此の先どう発展するか分らないが今迄の処、其の度毎に何かしら新しい天地を開拓している。」とあります。

この度、ご子孫の方から、河井達海の商品・スケッチや資料を寄贈いただきました。ご寄

達海はこの恩師からの言葉を大切にしております、昭和五十二年に出版した自身の画集に、「私にとってはかけがえのない玉稿でここにあえてこの家宝を再録させていただく」と記し、この恩師からの推薦文を掲載しました。

達海は、明治三十八年（一九〇五）津山市で生まれました。昭和四年（一九二九）に第十回帝展に初入選を果たしたあと、第六回文展特選など数々の賞を受賞します。昭和二十四年には、大阪学芸大学（現…大阪教育大学）教授となり、多くの人たちの指導にあたり、昭和五十二年には勲二等瑞宝章を叙勲しました。

達海は、明治三十八年（一九〇五）津山市で生まれました。昭和四年（一九二九）に第十回帝展に初入選を果たしたあと、第六回文展特選など数々の賞を受賞します。昭和二十四年には、大阪学芸大学（現…大阪教育大学）教授となり、多くの人たちの指導にあたり、昭和五十二年には勲二等瑞宝章を叙勲しました。

この度、ご子孫の方から、河井達海の商品・スケッチや資料を寄贈いただきました。ご寄

達海はこの恩師からの言葉を大切にしております、昭和五十二年に出版した自身の画集に、「私にとってはかけがえのない玉稿でここにあえてこの家宝を再録させていただく」と記し、この恩師からの推薦文を掲載しました。



「白椿」

達海は、明治三十八年（一九〇五）津山市で生まれました。昭和四年（一九二九）に第十回帝展に初入選を果たしたあと、第六回文展特選など数々の賞を受賞します。昭和二十四年には、大阪学芸大学（現…大阪教育大学）教授となり、多くの人たちの指導にあたり、昭和五十二年には勲二等瑞宝章を叙勲しました。

この度、ご子孫の方から、河井達海の商品・スケッチや資料を寄贈いただきました。ご寄

達海はこの恩師からの言葉を大切にしております、昭和五十二年に出版した自身の画集に、「私にとってはかけがえのない玉稿でここにあえてこの家宝を再録させていただく」と記し、この恩師からの推薦文を掲載しました。

達海は、明治三十八年（一九〇五）津山市で生まれました。昭和四年（一九二九）に第十回帝展に初入選を果たしたあと、第六回文展特選など数々の賞を受賞します。昭和二十四年には、大阪学芸大学（現…大阪教育大学）教授となり、多くの人たちの指導にあたり、昭和五十二年には勲二等瑞宝章を叙勲しました。

この度、ご子孫の方から、河井達海の商品・スケッチや資料を寄贈いただきました。ご寄

達海はこの恩師からの言葉を大切にしております、昭和五十二年に出版した自身の画集に、「私にとってはかけがえのない玉稿でここにあえてこの家宝を再録させていただく」と記し、この恩師からの推薦文を掲載しました。

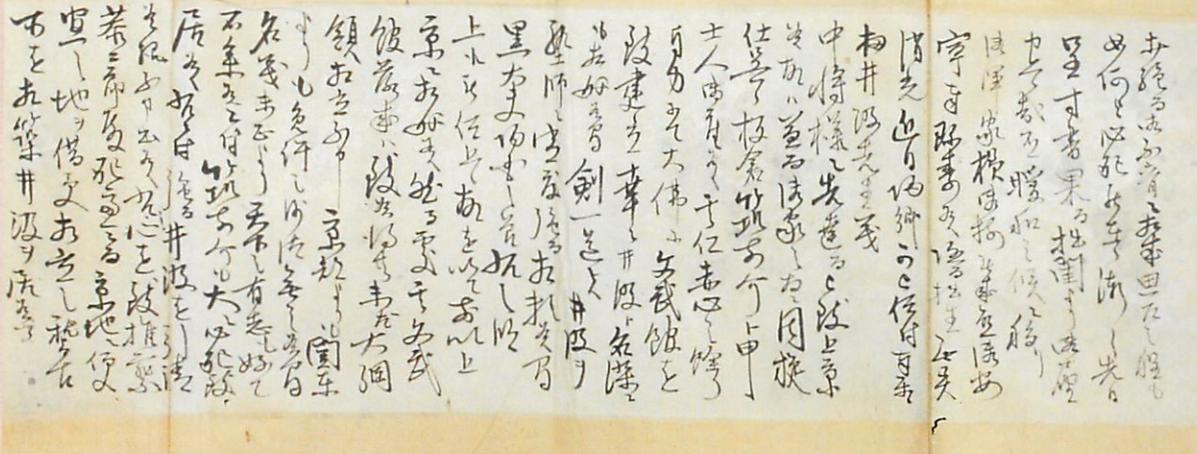
また、達海は、「絵はいつも大衆の中にあつてより多くの人が楽しみ、飾って心豊かな生活をエンジョイするものである」という思いを大切にしていたと伝えられています。

写真の作品は、大原女を描いた「白椿」という作品で、河井達海自身がデザインして彫刻を依頼した額が使われています。

ある書簡から見た鞍懸寅二郎と井汲唯一の交流

小島 徹

書簡の読み下し



中島菅右衛門・同勇次郎宛 鞍懸寅二郎書簡 文久3年(1863)3月9日付 (当館寄託 矢吹家弓斎叢書570「志士筆牘」所収)

打絶^ニ御不音^ニ相成、思召^ニ之程も如何と心配罷在候、漸く先日呈寸書、果^ニ拙園より御届申上候哉否、暖和之候^ニ移り、御渾家様御揃被成、愈御安寧奉^ニ珍素候、随^ニ拙生無異消光、近日帰郷可被仰付奉存候、扱井汲先生義、

中将様^ニ先達^ニ而被致上京候故ハ、兼^ニ御家之為^ニ周旋仕呉候板倉筑前介ト申士人御座候、其仁赤心之余り自力にて大仏に文武館を致建立、幸^ニ井汲ト名染^ニも相成候間、劍一道^ニ者井汲ヲ塾師^ニ定度、強^ニ相願候間、黒大夫帰国之節、右之段上^ニ被仰上候故を以て、前以上京^ニ相成候、然る処其文武館落成ハ致候得共、未だ大綱領相立不申、京都よりも関東よりも免許之沙汰無之候間、名義未正より天下之有志も好て不参候^ニ付、筑前介も大^ニ心配致居候、右^ニ付、強^ニ井汲を引請候様不申出候、右之心を致推察、恭二郎殿配慮^ニ京地^ニ便宜之地ヲ借受、相応之稽古所を相築、井汲ヲ居候ハ、

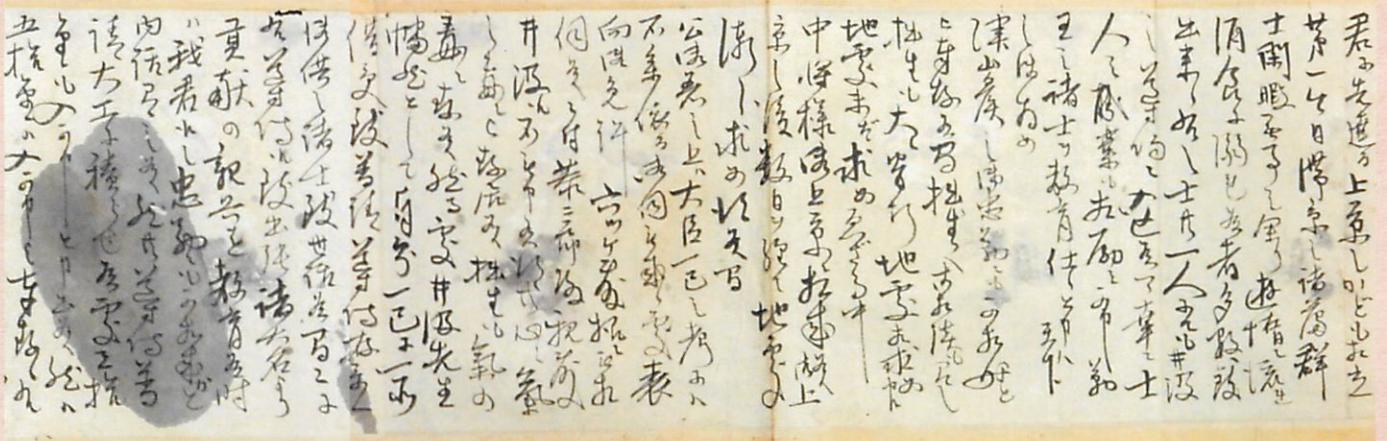
※「名染」は馴染の誤り

資料の概要

上の資料は、幕末・維新期に活躍した津山藩士で勤王家の鞍懸寅二郎が、香々美構大庄屋の中島菅右衛門と同勇次郎に宛てて発した文久3年(1863)3月9日付の書簡です。当館に寄託されている矢吹家文書のうち、弓斎叢書570番「志士筆牘」に収録されています。「志士筆牘」は、同じく津山藩士で勤王家の井汲唯一と鞍懸の書簡数通ずつを、裏打ち・貼継ぎのうえで折本に仕立てたものです。

鞍懸はもともと赤穂藩森家の家臣で、勘定奉行に抜擢されたものの、保守派によって左遷・追放され、この書簡の前年10月に儒者として津山藩に召し抱えられたばかりです。津山藩への仕官が決まる前は、香々美構大庄屋の中島家に寄宿して世話になっていました。この書簡の日付は月日のみですが、以下で触れる内容から文久3年と特定できます。

なお、この書簡は昭和17年(1942)に出版された坂田義一著『鞍懸吉寅先生略伝』に、冒頭の時挨拶を除くほぼ全文の翻刻が掲載されるほ



※「導場」＝道場の誤り

君に先達而上京之かとも相立、
 第一今日滞京之諸藩群
 士、閑暇無事之余り遊惰ニ流れ、
 酒食に溺れ候者多数致
 出来候、右之士共一人にても井汲
 之導場ニ入込候ハ、幸ニ士
 人之職業も相勵ミ可申、勤
 王之諸士ヲ教育仕候と申ハ天下
 之御為め、
 津山侯之御忠勤ニも可相成と
 被奉存候間、拙生へ御相談も有之、
 拙生も大ニ骨折、地処相求め申候、
 地処未だ求めざる中、
 中将様御上京ニ相成候、御上
 京之後数日ヲ経て地処
 漸々求め得候間、
 公御着之上ハ大臣一己之考にハ
 不参、依而御伺被成候処、表
 向御免許六ツケ敷様ニ被相
 伺候ニ付、恭二郎殿親敷
 井汲江不被申候得共、心ニ氣
 之毒ニ被存居候、拙生も氣の
 毒ニ存候、然る処井汲先生
 幡然として自分一己に一所
 借受、致普請導場拵置、
 御供之諸士致世話候間々に、
 右導場ニ致出張、諸大名より
 貢献の親兵を教育候時
 ハ、我君君之忠勤ニも可相成か
 内話有之候、然共導場普
 請大工に積らせ候処、三拾
 金も入可申と申出候、然ハ
 五拾金ハ入可申奉存候、右

(次頁へ)

か、竹内佑宜氏編著『年譜式志士鞍懸寅二郎ノオ
 ト』にも、先の略伝を引用する形で紹介されてい
 ます。略伝の出版時に誰が所蔵していたのか、現
 状と同様に「志士筆牘」という折本に仕立てられ
 ていたのかなど詳細は不明ですが、ともかくも最
 終的に郷土史家の矢吹正則・金一郎父子の手に渡っ
 たことは、資料保存の観点からみて幸いなことで
 した。

書簡の内容

まず本題に入ると、井汲唯一が上京した事情と
 して、近江出身の勤王家の板倉筑前介(淡海槐堂)
 が建設した文武館に剣術師範として井汲を招聘し
 ようとする動きがあったことが記されています。
 しかし、建物は完成したものの大綱領が定まらず、
 幕府や朝廷の免許も得られない中途半端な状態
 であるため、板倉も遠慮して井汲の招聘を強く求め
 ては来ない様子で、それを察した在京の津山藩士
 たちが、井汲を師範とする稽古所(道場)を設立
 すべく奔走するのですが、これも不都合があつて
 進展しません。そこで、井汲が自らの裁量で道場
 建設を計画するのですが、30〜50両と見積もられ
 る費用の調達手段がありません。井汲に何とか協
 力したい鞍懸が、出資を依頼したのが中島家であつ

金子之出処無之、井汲之
心中氣之毒ニ奉存候、
公之導場御許容無之ハ、拙
生力之救べきにあらず、但
私ニ手伝之義ハ、如何ニも骨
折度奉存候、就而ハ井汲先
生門人之今度備中等之
門人中江出金手伝頼遣ス
序ニ御立寄七可申候、
貴家様御事、是迄段々御厄
介ニ相成候上、本藩江被召出候
後も直ニ上京之事故、多
分之費用より毎々拝借金
相重り、誠ニ御氣之毒と奉
存候、右ニ付、誠ニ申上兼候得
共、何卒前文之由御推察
被下、少々普請金天下
之為めに御取替被下間敷
哉、客臘植原氏退去も万
一仕候節ハ、拾金御取替植原
氏江直ニ御渡被下候御約定も
御座候、其代りニ井汲へ御取
替被下候と申訳ニハ無御座候
得共、何卒思召丈ケ拝借仕
度奉願候、万此仁より
御聞取可被下候、小生事ハ
近々御供にて帰国被仰付候様
内々承り候、然ハ万一御推
察御出金被下候ハ、直ニ
此仁江御渡被下度、乍併右ハ
御相談迄ニ申上候のミにて、

(前頁より)

たという訳です。中島家には、津山藩出仕前から厄介になっているうえに、出仕後すぐに上京したため、借金がかさんでいる中、「たいへん気の毒で申し上げにくいが」と前置きしつつ、天下のために道場普請の費用を出資してもらえないだろうか」と頼み込んでいます。本題を記した後は、近々津山へ帰ることができそうだといいことで、ワラビ取りの誘いを楽しみにしていることや、当時上洛していた將軍徳川家茂や諸大名の動静などが書きつづられ、尚々書では「お縫」という中島家の女性に何か土産を買って届けたいけれども、無一文なので叶わないと詫びることで、手元にまとまった金が無いことをアピールして締めくくっています。

井汲への心情

この書簡では、井汲に対して呼び捨てと「先生」の敬称を付けた呼び方とを併用しています。平素の呼び方がどうだったのかは知る由もありませんが、単なるお世辞ではない敬意の念も抱いていたのではないのでしょうか。そして、文中で多用される「氣之毒」の言葉に、京都での剣術道場設立の計画を何とか実現させてやりたいけれども、なかなか思うに任せず申し訳ないという、井汲に対す

是非(いふ)と御(ご)むりを申
 訳(わけ)ニハ無(な)御(ご)座(ざ)候(こう)、扱(あ)拙(ち)生(せい)義(ぎ)ハ
 近(ちか)々(々)拜(ひ)眉(まゆ)、わらびとり之
 御(ご)誘(ゆう)引(いん)奉(ほう)楽(らく)候(こう)、扱(あ)
 公(こう)方(かた)様(さま)昨(け)日(にち)参(ま)内(ない)、昔(むかし)之(これ)
 御(ご)参(ま)朝(あ)に引(い)替(か)替(か)、見(み)物(もの)人(ひと)あ
 とにおる者(もの)ハ立(た)立(た)なから拜(ひ)見(み)
 仕(し)候(こう)様(さま)之(これ)始(は)末(ま)ニ御(ご)座(ざ)候(こう)、
 十一(じゅういち)日(にち)ニハ加(か)茂(しげ)江(え)
 天子(てんし)御(ご)幸(さち)、
 将(しょう)軍(ぐん)様(さま)奉(ほう)初(はつ)在(あ)京(きやう)
 諸(しよ)侯(こう)皆(みな)々(々)御(ご)供(く)之(これ)由(よし)、
 十二(じゅうに)日(にち)御(ご)暇(あ)乞(こ)之(これ)御(ご)参(ま)内(ない)
 有(あ)之(これ)、十三(じゅうさん)日(にち)御(ご)出(い)立(た)立(た)之(これ)由(よし)御(ご)承(しょう)
 知(ち)可(か)被(ひ)下(くだ)候(こう)、先(ま)ハ右(みぎ)願(ねが)上(あ)度(ど)
 如(ごと)此(ごと)御(ご)座(ざ)候(こう)、恐(おそ)惶(ほう)謹(謹)言(げん)
 三(さん)月(げつ)九(にゅう)日(にち)、鞍(あ)懸(けん)寅(とら)二(に)郎(らう)
 中(なかつ)島(しま)菅(すけ)右(みぎ)衛(ゑ)門(もん)様(さま)
 中(なかつ)島(しま)勇(ゆう)次(じ)郎(らう)様(さま)
 尚(なほ)々(々)、時(とき)下(くだ)折(せ)角(かく)御(ご)厭(えん)
 可(か)被(ひ)成(せい)候(こう)、乍(は)末(ま)筆(ひつ)
 御(ご)家(け)内(ない)様(さま)正(ただ)可(か)然(ぜん)御(ご)通(つう)声(せい)
 奉(ほう)願(ねが)候(こう)、お縫(ぬい)殿(とん)に紅(べに)ニても
 なんでもめづらしきもの
 津(つ)山(やま)ニ御(ご)送(お)り申(ま)度(ど)候(こう)得(え)共(ども)、
 拙(ち)生(せい)一(いち)己(こ)之(これ)金(かね)子(こ)トゆふもの
 八(はち)一(いち)銭(せん)も無(な)之(これ)候(こう)間(ま)、さし上
 かね御(ご)推(お)察(さつ)可(か)被(ひ)下(くだ)候(こう)、
 又(また)已(や)上(じやう)

是非(いふ)と御(ご)むりを申
 訳(わけ)ニハ無(な)御(ご)座(ざ)候(こう)、扱(あ)拙(ち)生(せい)義(ぎ)ハ
 近(ちか)々(々)拜(ひ)眉(まゆ)、わらびとり之
 御(ご)誘(ゆう)引(いん)奉(ほう)楽(らく)候(こう)、扱(あ)
 公(こう)方(かた)様(さま)昨(け)日(にち)参(ま)内(ない)、昔(むかし)之(これ)
 御(ご)参(ま)朝(あ)に引(い)替(か)替(か)、見(み)物(もの)人(ひと)あ
 とにおる者(もの)ハ立(た)立(た)なから拜(ひ)見(み)
 仕(し)候(こう)様(さま)之(これ)始(は)末(ま)ニ御(ご)座(ざ)候(こう)、
 十一(じゅういち)日(にち)ニハ加(か)茂(しげ)江(え)
 天子(てんし)御(ご)幸(さち)、
 将(しょう)軍(ぐん)様(さま)奉(ほう)初(はつ)在(あ)京(きやう)
 諸(しよ)侯(こう)皆(みな)々(々)御(ご)供(く)之(これ)由(よし)、
 十二(じゅうに)日(にち)御(ご)暇(あ)乞(こ)之(これ)御(ご)参(ま)内(ない)
 有(あ)之(これ)、十三(じゅうさん)日(にち)御(ご)出(い)立(た)立(た)之(これ)由(よし)御(ご)承(しょう)
 知(ち)可(か)被(ひ)下(くだ)候(こう)、先(ま)ハ右(みぎ)願(ねが)上(あ)度(ど)
 如(ごと)此(ごと)御(ご)座(ざ)候(こう)、恐(おそ)惶(ほう)謹(謹)言(げん)
 三(さん)月(げつ)九(にゅう)日(にち)、鞍(あ)懸(けん)寅(とら)二(に)郎(らう)
 中(なかつ)島(しま)菅(すけ)右(みぎ)衛(ゑ)門(もん)様(さま)
 中(なかつ)島(しま)勇(ゆう)次(じ)郎(らう)様(さま)
 尚(なほ)々(々)、時(とき)下(くだ)折(せ)角(かく)御(ご)厭(えん)
 可(か)被(ひ)成(せい)候(こう)、乍(は)末(ま)筆(ひつ)
 御(ご)家(け)内(ない)様(さま)正(ただ)可(か)然(ぜん)御(ご)通(つう)声(せい)
 奉(ほう)願(ねが)候(こう)、お縫(ぬい)殿(とん)に紅(べに)ニても
 なんでもめづらしきもの
 津(つ)山(やま)ニ御(ご)送(お)り申(ま)度(ど)候(こう)得(え)共(ども)、
 拙(ち)生(せい)一(いち)己(こ)之(これ)金(かね)子(こ)トゆふもの
 八(はち)一(いち)銭(せん)も無(な)之(これ)候(こう)間(ま)、さし上
 かね御(ご)推(お)察(さつ)可(か)被(ひ)下(くだ)候(こう)、
 又(また)已(や)上(じやう)

る鞍懸の当時の心情が集約されています。
 実はこのわずか半年後、8月18日の政変による
 状況急変のため、井汲は津山藩によって捕えられ
 てしまいました。その顛末は、津山藩の「町奉行
 日記」文久3年10月朔日条に詳述されていますが、
 この時、鞍懸も捕り手に加わって井汲を祇園の遊
 郭へ誘い出し、酒に酔わせて眠らせるといふ一計
 を案じています。
 このことが影響したのか、慶応2年(1866)
 の美作改政一揆を記録した「改政一乱記」では、
 鞍懸は優れた勇士の井汲を陰謀によって捕えた策
 士として描かれ、鞍懸の登用が一揆の原因とされ
 ています。ただし、逮捕に至る経過の叙述には不
 正確な箇所もあり、鞍懸を意図的に悪者に仕立て
 ている様子がかがえ、注意が必要です。
 井汲の行動を急進的で危険だと認識した藩主や
 重臣らの逮捕の命に、鞍懸はただ従っただけとい
 うのが実情と考えられます。井汲の逮捕に向かう
 鞍懸の心情も、まさにこの書簡と同様「気之毒」
 の一語に尽きるでしょう。
 では逆に、井汲は鞍懸をどう見ていたのですよ
 うか？残念ながら、手掛かりとなる資料は今のと
 ころ確認できません。しかし、それだけに、彼ら
 二人の交流の一端を示すものとして、この書簡は
 非常に貴重です。

お知らせ

事務局員異動（平成30年4月1日付）

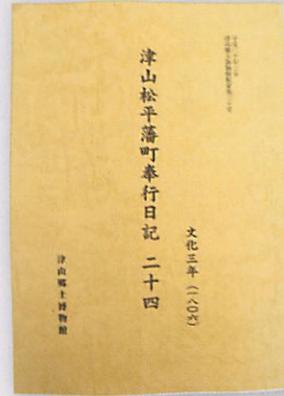
○前館長 尾島 治（退職）→新館長 小島 徹

○新任 学芸員 服部綾乃

新刊のご案内

津山松平藩町奉行日記24（文化3年）を刊行しました
頒布価格800円

この年は、江戸藩邸の火災により、城下町からも普請の手伝いに動員されたり、また、80歳以上の長寿者にお祝いを出したりと色々な出来事が記されています。
ご興味のある方はお買い求めください。



平成30年度 津山郷土博物館 行事予定

展 示

休館中につき資料展示は休止します

広報活動

◆博物館たより「津博」の刊行

NO.96 / 5月 NO.97 / 7月

NO.98 / 10月 NO.99 / 来年1月

出 版

◆「津山松平藩町奉行日記25」翻刻出版

◆平成29年度年報の刊行

教育普及活動

◆古文書講座「美作の古文書を読む」

5月16日(水)・6月20日(水)・7月18日(水)

9月19日(水)・10月18日(水)・11月21日(水)

1月16日(水)・2月20日(水)・3月20日(水)

(1月以降は予定)

夏休み子供歴史教室

◆弥生土器をつくろう

7月23日(月)・8月16日(水) 全2回

◆勾玉をつくろう

8月21日(火)・8月22日(水)

文化財めぐり(友の会)

◆5月26日(土)・10月27日(土)・3月16日(土)



博物館だより「つはく」
No.96 平成30年5月1日



[編集・発行] 津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tv.tn.ne.jp

[印刷] 有限会社 二葉印刷

休館中のご案内

[資料閲覧]

閲覧可能日：月曜日～金曜日（要予約）
（祝日・年末年始は除く）の午前9時～午後5時

[頒布資料について]

当館発行の頒布資料につきましては、原則郵便にて受け付けます。詳細はお問合せください。